俺と隣りの席のヤツ

東條誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と隣りの席のヤツ

【Ｎコード】
Ｎ１３０６ＢＡ

【作者名】
東條誠

【あらすじ】
ある学校に入学し、ヤツと出会う。そこから始まるグダグダな毎日。

ヤツとの遭遇

「やはり、ぱんつは白がいいと思うんだ。」
・・・今、隣に座っている奴はなんと言った？
「いや、白だと清楚で綺麗な感じだろ、心も綺麗そうじゃないか？」
横を見る・・・しまった、隣のヤツと目が合ってしまった。しかもなにか、俺に向かって話しかけてるらしい。仕方ない。
「君は何を言っているんだ？頭大丈夫か？」
取り敢えずまだ初対面だ、やんわりと脳の異常があるかも知れない事を伝えてみる。
「いや、頭は大丈夫だ。だが、君の股間は危ないかもしれない。少し腫れているようだ。」
本格的な脳の異常のようだった。もう救いようがない。このまま話続けると俺も同類だと思われる。
「いや、俺の股間は腫れてないから。もう話かけないでくれる？」
そう言って席を立ち、別の席に移ろうとした。

ガラガラ

・・・しまった、もう時間か。先生が来てしまった。仕方ないからまたその席に座る。
「これがツンデレか・・・萌える。」
隣の席のヤツが何かほざいているが、放っておこう。

入学初日、教科書等を配った後の適当なＨＲが終わり、なぜか席は現在の場所で一年間、固定される事になった。あの担任、やる気ないだろ・・・
「やあ、これから一年間ずっと隣だな。宜しくな。」
「誰か席を変わってくれる方はいませんか～！今なら朝コンビニで

買ったプリンをつけちゃう！！」
取り敢えず誰かに助けを求めてみた。・・・反応が全くない。というか殆ど全員さっき貰った教科書を読んでいる。なにこれ、みんな勉強好きなの？ガリ勉なの？いやまて、きっと巻き込まれたくない人が大半なんだ。
「いやぁ、やっぱりこの学校は違うな。本当に勉強するためだけに来る人が多いこと。」
ぇ、まじで？いや、俺はただ家が近いから選んだだけなんだが。
「まさか趣味的な話をして、反応をしてくれる人が居るとは思わなかったよ。」
「まてまて、このクラスはたまたまだろ。別のクラスにはちゃんと普通の趣味を持った人が居るだろ？」
お前のぱんつが趣味発言は置いといて。
「どうだろう？いたとしてもすごく少ないと思うし、そういう人と交流する機会はないんじゃないかな？」
「いや、普通にクラブとか、部活とかあるだろう。」
「いや、ないよ？」
「・・・え？」
「ない、というか君はこの学校のシステムを知らないのか？」
「システム？」
「ああ、この学校には、部活等が存在しない。代わりに各教科の先生が、時には外部の偉い先生も交えて毎日補習を行なっている。参加は自由だが、通常の授業が遊びに思える位、レベルの高い事を学べる。」
「え、部活、無いの？」
「無い、あるのは補習のみ」
「俺の、バラ色の、学園生活は？」
「バラ色ってなんだ、君は実に面白いな。」
俺のなったらいいなと思っていた楽しい学生生活は入学初日にして崩れ去った。ショックでちょっとカタコトになっている。

「いいじゃないか、そんな事より私と白ぱんの話をしないか？」
「うるさい！ぱんつは縞々が一番いいに決まっている！」
・・・しまった。
「ふふふ、やはり君もぱんつを語れるでないか。」
「話しかけないでくれる？」
「うむ、ツンデレ乙」
「というか君は女子だろ！ぱんつとか言って恥ずかしく無いのか！」
「いや、女子だが、ぱんつは見せるモノだろう。君も見たいんだろう？」
「もっと恥じらいを持ちなさい！」
いや、見たいけど！！！
「ふむ、すまない。これから一年は隣同士だ。ある程度は仲良くしようじゃないか。」
右手を差し出された。
「まあ、いいか。いきなり変な事話しかけるなよ。」
右手を握り返す。これから一年は隣同士だ。我慢してやっていくしか無い。
「ああ、これから一年宜しくな。で、ぱんつの話なん」
「用がある時以外話しかけるなよ。」
また、危険な方向に話を持っていかれそうだったので遮った。
「ふふふ、これから一年で君を攻略するわけか。胸が躍るな。」
隣のヤツがまだ何か言っているようだ。もう聞かないことにする。
今日は授業も無く、もう帰る時間だ。とっとと帰ろう。というかいつの間にか誰も居なくなってた。
「君は帰るのか、今日も補習授業は行なっているが。」
「勉強なんて普通の授業だけで十分だ。じゃあな。」
「ふむ？じゃあまた明日な。」

こうして俺の入学初日は色々な意味で終わりを告げた。
・・・もう何処でもいい、何処か他の学校に転校したい。

失敗した売り出し

次の日、普通に登校した。家から徒歩５分。予鈴１０分前に家を出れば間に合う。・・・まあそれを選んで失敗した訳だが。
ちなみに昨日、母に転校したいと申し上げたら却下された。部活動の有意性などを数十分に渡り説いたのだが、
「結局それって勉強したくなくて遊びたいだけなんじゃないの？」
と言われた。当然だろう。俺も親ならそうする。
今日はどうやって説得しようか考えながら、教室の扉を開ける。
ガラガラ
「おはよう、君は早いな。」
何故かヤツしか居なかった。あれ、今日平日だよね、普通の登校日だよね？おかしいな？？無視するのもアレなので適当に返事を返す。
「オハヨウ。他の皆は？」
「面白い顔だな。ああ、他の連中はアレだ。部活で言う所の朝練というやつだ。」
マジかよ、ほぼクラス全員かよ。というか貴様は何故ソレに参加しないんだ。
「私はこの学校よりも家のほうが有意義に過ごせるからな。単純に住んでいる所から近いからここを選んだ。」
「あ、そう。」
あまりこの話題を続けると、俺自身にダメージを受けそうなので早めに話を打ち切る。というか何故ちゃんと調べなかったんだ過去の俺。

キーンコーン・・・
予鈴が鳴った。
他の連中がクラスにぞろぞろと戻ってくる。
「おはよう、朝から精が出るな。」

取り敢えず挨拶をする。なにか皆よく分からない専門書を読んでいる。
「オハヨウ。」
・・・なんだ、素っ気ないな。挨拶だけしたらすぐに本に目を戻すとか。相当勉強好きなんだな。でも人付き合いもショウゼ。

何人かに挨拶したが、皆おんなじ感じで、黙々と専門書だか参考書だかを読んでいる。
マジデこのクラスヤバイ。転校したい。
「この学校に来る連中は皆同じだよ。勉強する為に来る人間が大半だ。」
隣のヤツが言った。
「いや、お前みたいに家が近いからって来る人も居るだろ。」
俺も入れたし。というか入ってしまったし。
「殆ど居ないんじゃないかな。この学校、まず頭の良い、そして特に記憶能力が優れてないとまず入れない。」
「よく分からん、普通に入試だろ？」
「君は入試テストの内容を覚えているか？」
覚えているといえば覚えている。が、その前後の事は思い出したくない。
「テストの前、最初に何か見せられただろう。これを覚えておけという。」
「ああ、小説だったな。それも糞ツマラナイ、無駄に長い感じの。」
しかもソレを１０分で読めとか言うんだぜ？無いわー。
「それに関する問題が最後のテストに数問あっただろう。それを正解していなければ入れないんだよ。」
「えマジ？」
「マジ。」
だってアレ、感想文書くかと思ったら「１５２ページのみを行間、改行等も含め全て写せ」だぞ？そんなの答えられたヤツいるのか？・

・・いや、俺は答えられたが。
「だからここに居る殆どの人間は天才で、当然この学校の事を調べていて、学問を学ぶ為だけにに来ているはずだ。」
「いや、天才でも人付き合いはするだろ。」
「してるんじゃないか？放課後の講義で。ああ、君は初日から参加してなかったな。」
おいおい、そういう事か、皆すでにソコで交流を深めていたのか。仕方ない、今日は参加してみるか。
「今日からでは無理じゃないかな。既に君は、いや、何でもない。取り敢えず行ってみたらいいんじゃないかな。」
なにか含みを持たせた言い方だな。まあいい、今日は放課後色々回ってみるか。
授業は普通だった。初日なので適当にオリエンテーション的な授業で、とても天才が集まっている学校の
授業風景とは思えなかった。全ては通常授業の時間外に、か。

放課後、取り敢えずクラスの連中についていく事にした。
「行くのか。多分絶望するだろうが。まあ、また明日な。」
隣のヤツが何かを呟いた。そんな一日位で変わらないだろう。気にしないでおこう。

結論から言えば無理だった。初日に顔を出していない人は入れない。会員カード的なモノの提示を求められた。まだ二日目だろ、早すぎるだろ。取り敢えず担任に相談してみる。
「何故二日目にして入りたいんだ。君はその講義で何が学べるか知っているのか？」
いや、知らないし。そんな事調べても居なかったし。
「知らないのか、では無理だな。他の皆は何が行われいるか知っていて、その事を真剣に学んでいる。中途半端な気持ちのヤツは入れられない。ああ、ちなみに全ての講義において、初日に顔を出して

いなければ入れない。諦めるんだな。なに、安心しろ。参加しなくても学校の卒業自体は出来る。」

・・・絶望しいや、ヤツの思い通りになるのは癪だ。絶望なんてしてない！

俺は気分の沈みを誤魔化すように、鼻歌を歌い、スキップしながら家路についた。

仕掛けられた罠

三日目、今日はぎりぎりに登校した。また昨日も転校したいと話を母にしたが却下された。
「どうしてもって言うなら転校はダメだけど学校辞める事なら許すわ。いいじゃない、あの学校卒業すれば後の人生楽に生きられるわよ。たった3年でしょ、我慢しなさい。」
と言われた。辞める事は流石に考えたくない。親の説得は取り敢えず諦めよう。
学校の門に入って少しして予鈴が鳴る。研究棟の方からぞろぞろと人が流れてくる。俺はその流れに混じり自分のクラスに行った。
「おはよう、今日は遅かったな。どうしたんだ、家で泣いていたのか？」
「ああ、うん。いや、ないてねーし！絶望してねーし！！」
ヤツはなにか全部分かってるよ的な顔をして挨拶をしてくる。イラっとする。
「そんな事を言いながらお前も入っていないじゃないか！」
「確かに私は講義には参加していない。家の方が有意義に過ごせるからね。」
「なんだ、家でゲームでもしているのか？」
「まあ、似たようなモノだよ。」
ヤツが家で何をやっているかちょっと気になったが、別に友達でも無い。あまり聞かないでおこう。・・・俺もネトゲでも始めようかな。
キーンコーン・・・
取り敢えず授業には集中するか。

昼になった。学食やら購買もあるが、俺は弁当だ。今日はクラスの他の連中と食べようと思ったが、

「話しかけないでくれる？」
「頭の悪い人は嫌いです。」
「今忙しいのでまた今度。」
「講義に参加してない人とは会話出来ない。」
無理だった。というかこいつら、弁当食いながら専門書読んでやがる・・・そこまでか。
「私は学食に行くが、一緒に行くかね。」
隣のヤツが何かを言っている。
「学食か、一度見ておこうかな。」
べ、別に一人で食べるのが寂しい訳じゃないんだからね！
そんな訳で、学食にやってきた。結構広い。人もそこそこ入っている。だが、別に列が出来てたり、戦争になっていたりはしない。食券を買うのかと思ったら、そのまま席についた。
「ここでは注文をすれば大抵のモノは食べられるぞ。お金は後払いだ。月末に請求が来る。」
「まじで、じゃあ松茸とか、キャビアとか、フカヒレとかも食べれるのか。」
取り敢えず思いついた高そうな食べ物を並べた。
「その時在庫があれば食べられるぞ。だが、君の家は裕福なのかね？」
「・・・いや、普通だけど。」
「なら、高級食材はやめておいた方がいいぞ、月末に親が破産することになる。」
ヤツは注文を取りに来たスタッフに、今日のＡ定食と頼んでいた。
なんだ、普通だな。
「というか金は払わないのか？」
「ああ、食べた後で学生証を提示するんだ。もちろん現金でも払えるぞ。」
「ふーん。」
取り敢えず腹も減ってきたし、先に食べようと二段になってる弁当

箱の蓋を開けた。カレーが出てきた。
「君は弁当も面白いな。」
「いや、ちげーし！今日はたまたまだし！」
たまたまどころか、母は結構頻繁に変な弁当を作ってくれるが。今日は下段米、上段カレー、以上。というか、これ、カレーごはんにかけたら絶対あふれるよね？前にやめてねって言ったよね？
「皿でも借りるかね？」
「すいませーん、皿を貸して下さい。」
スタッフを呼んでヤツが皿を頼む前に自分で頼む。スタッフは何か難しい顔をしていたが、しばらくして皿を持ってきた。よかった、貸してくれた。カレーを皿に移し、食べ始める。ウマイ。カレーを食べていると、ヤツの頼んだものやってきた。ナンダアレ。
「なんだそれ、蟹？」
「ああ、見て分かるだろう。どう見てもカニだ。」
ヤツの定食には馬鹿デカい鍋にカニが入って、いや乗っかっていた。どう考えてもおかしい。というかもう定食の域を出ている。
「それ、Ａ定食？５００円のヤツ？」
そう、確かに５００円とメニューに書いてある。日替わりＡ定食をヤツは頼んでいたはずだ。
「ああ、今日は量が多いな。」
いや、もう量が多いというレベルの話では無い、一人で食べ切れたらフードファイトに出れるんじゃないか？
「まあ、食べきれなかったら残せばいいか。」
「おい貴様、何を言っている。」
カニを残すだと？なんという勿体無い事を！
「どうした？」
「貴様が残すなら残りを全部俺によこせぇぇ！」
「いや、別に構わないが。いきなりテンションが変わったな、どうした。」
「蟹だぞカニ！高級品だぞ、それを捨ててしまうなんてトンデモナ

イ！捨てるくらいなら俺の腹が破裂するまで食う！」
「ふむ、そんなに高いものでも無いが。まあいい、理由は理解した。では、温かい方が良いだろう早く持っていけ。」
「うおおおおぉぉぉ！！！」
俺はカレーを速攻で食べ終わり、カニに手を伸ばした。

俺は午後の授業には出れなかった。カニを食い過ぎたため、保健室で唸っていたからだ。俺を罠にハメるとは、ヤツはなかなかの策士だな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1306ba/

俺と隣りの席のヤツ

2012年1月5日23時53分発行